



佃 幹夫

1959年4月六甲学院に就任、友方茂先生（体育）より引き継いだこのサッカー部を指導して早くも30数年の月日が経った。

私自身、一何故はじめたのか定かではないが、まがりなりにも六中時代に始めたサッカーが、まさか一生の仕事になるなんて夢にも思わなかったが、振りかえって見ればヒルケルさんのこと、先輩のこと、それに同級生や後輩・教え子のことなどなど、サッカー部を通じての思い出が心から離れないのです。文武両道の六甲サッカー部精神に徹しながら誇り高い成績を挙げ、世に大勢な逸材を送りつづけた我が部には50周年史と云う少し仰々しく

感じられる行事に取り組んで創部来の歴史を整めておくだけの価値は充分あるし、サッカーをして来られたOB夫々が思い出として大切にしておられる心が時が継がることで過去からの伝統とか後輩に伝えたエネルギーを実感することによってダイナミックに蘇るだろうし、できれば100年に向けてのスタートに寄与する事があればなど、考える中で各期OBの皆さまのご理解を与えて本誌発行が実現致しました。私の整理不足で大いに迷惑をお掛けしながら鈴木昭会長はじめ創部に尽力された7期生の皆様そして各期代表の方々の努力により充実した資料収集ができ心から感謝致しております。

佃先生の思い出



佃幹夫先生

佃先生には散々怒られた、あるいはとても怖かった、などという話をしても格別珍しいことでもないと思うので、ここではいささか個人的な思い出を述べてみたい。

38期は際立った成績を残したわけではないが、それでも高2の夏は調子が良かった。公式戦を含めて、8月を6勝1敗1分で乗り切った我々は、いささかの自信を胸に、秋最初の本戦へ臨んだのである。ところが1回戦で、それまで負けたことのなかった御影高校にPK戦の末あえなく敗れてしまった。そのため試合後には、キャプテンの上村と副キャプテンだった私は殴り合い（という程ではないが）の大喧嘩をしまい、これをきっかけに38期は真っ二つに分裂し、私は練習に出なくなった。佃先生は当然のことながら、練習に出ない私に怒りの鉄拳をみまわれた。しかし理由を知った先生は、懇々と私を諭し、上村と引き合わせて和解させて下さったのである。

当時の我々は、お互いに「どうしてこんな奴と」と思ったのであるが、これを機会に私も練習に復帰して、サッカーを続けることができたのである。そして今でもサッカーが好きでいられるのは、両者の言い分を良く聞いた上で適切な措置を取ってくださった先生のお陰だと、今にして大いに感謝している。

38期 今松 泰



現役のころ先輩と話をすると、必ず「つくせんも、丸なったなあ」といわれたものだ。「あんなに怖いのに、丸なったはずはない」と思っていたが、こんな写真を見ると、昔のつくせんはもっともっと怖かったのだ。

佃先生について

佃氏：「早よ立たんかい！」

M——立ち上がらず、手首を見つめている

佃氏：「骨折や！骨折や！」

とボールをぶつけてくる

M：「あの～ ほんとに折れてるんですけど…」

佃氏：「エッ～！」

病院にて治療中のMに向かって笑いながら

佃氏：「どうや 痛いやろお～」

39期 森岡

